

大平さんの思い出

芦原義重

大平さんが亡くなられて半年になるが、時とともに大平さんの評価が内外に高まり、政治家としてのご功績がますます不滅の光彩を放っていることは、その急逝を惜しむ友人の一人として、せめてもの心の慰めである。

大平さんとは同郷の誼ということもあつて、池田さんの秘書官時代から四半世紀ものご交誼をいただいてきた。その後官房長官を皮切りに政治家として次々と累進をつづけられたが、どこまでも人間として不変、不動のものを持つておられた。総理になられてからも、読書を欠かさず、思索することを大切にされ、また誰に対しても高ぶるところはなく、どんな約束もきちんと守られ、最後まで篤実であり続けられた。このようなお人柄のため、郷里の香川では大平さんの人望は大変なもので、弘法大師の再来とまでいわれ、人々の声援には利害を離れた暖かい心がこめられていた。これが最後まで大平さんの気持を支えたのではないかと思つている。

総理になられてからは、内に財政問題などいろいろのご苦労をかかえ、外からは第二次の石油危機や国際政治上の難題が次々と押し寄せ、ほんとうに苛酷な修羅場に立ちつつけられた。この頃は時々お会いしても、孤独を耐え忍んでおられる様子がうかがわれることもあり、心中ご苦労をお察し申し上げたものである。

しかし大平さんの政治は決して消極的な受け身の政治ではなかった。大平哲学ともいふべき世界をにらんだ経世の思想と強い信念を持つておられ、熟慮断行されるころがあった。このため内政面に大きな足跡を残されたばかりか、対外的にも大平外交の成果を上げられ、日本の総理として国際社会の高い信頼をえておられた。

実は総理ご在任中、第二次の石油危機の時だったが、その対応策について一度私見を申し上げたことがある。それは石油価格の大幅引上げに対して、物価への影響を人為的に抑えることなく、むしろ素直に末端価格に反映することが適切な経済政策であるとの内容だった。この点について大平さんは経済原則を实によく理解しておられ、私の意見を了とされた。そして後に禍根を残すような政策は取らないと断言され、事実万難を排してそれを実行された。私は、わが国経済が第二次石油危機をうまく乗り切ることができたのは、こうした大平さんの英断のおかげであると思っている。また大平さんは、一国の消長を決するものはあくまでも民間の活力であり、政治はその介添役に過ぎないというのが持論で、政治のやるべき分野に明確な認識を持たれ、政治の節度を重視しておられた。この点、大平さんほど自由経済体制というものをよく理解された政治家はなかったのではないかと体系的な考えを持っておられるだけに、実際の政策面で優先順位の確立など総合調整能力を持たれ、常に短期、長期の両面から政策課題を考える見識を備えておられた。その上、卑近なことでは人の使い方が実にお上手であり、人の能力をフルに引き出す将たる資質には舌を巻くほどのものがあつた。かえりみて大平さんはほんとうに総理の器であつたとの印象が深い。このような大平さんが、二十一世紀への日本の発展の路線を決めるべき今日、短命であられたことは日本ばかりか世界にとつて大きな損失である。せめてあと数年の寿命が欲しかったと思うのは多くの人々の率直な気持であろう。

最後に大平さんにお会いしたのは、ちょうど入院される直前、私邸へうかがつた時だったが、その頃、外遊から解散、総選挙と心身ともに無理を重ねられ、あの頑健な総理の顔にも深い疲労の色が滲んでいた。私はこれが気がかりになって、身体には十分注意されるよう申し上げたが、最早手遅れであり、これが最後のお別れになつてしまった。今はただ、天涯に心安らかに過しておられることを信じるばかりである。

(関西電力会長)